解疑

第壹篇

佛人ドルワールドレゼー演說
日本　林　壽太郎　筆記

解疑

第壹篇

明治三十四年・内交

緒　言

眞の神及人性に關する高尚なる論議、完全無缺なる道德倫理を敎ゆるの眞宗敎に對して諸種の論難非議を試むるは、神の唯一なることを忘失して多神敎を信ずる國人の常情なり、之を以て信者未信者の間には宗敎上の論爭常に多し、殊に多神敎者なる亞細亞人の疑問は古來一神敎を信する余儕歐洲人の爲に往々意表の外に出るものあるなり、而て是等多くの疑問中意味深高なるもの、淺薄なるもの、平凡なるもの、癡愚なるもの其類亦甚だ多し、然ども凡愚笑ふに堪えたる如きものはど却て其明解に苦むは奇といふべし、是他なし斯る疑問を發するの人は到底論理を咀嚼するの頭腦なきを以て成るべく平俗なる比喩的解答を與へざる可からざるもの有れはなり、而て

數年前より我甲府山城両教會信者諸子の奮勵に依りて教理研究會を開き今日まで繼續したるの結果、雜多なる難問の余が手許に蒐集せるもの頗る多きを致せり、此に於て未信者間に最も多く稱へらるべく思はるゝ者の中、宗教、天主教、造物主に關するもの而已を撰擇し通俗平易なる解答を附して、先第一篇とし刊行するの運びに到れり、自餘の分ハ猶近日第二篇として續刊すべし、然れども疑問は是に盡きたるに非ず、看者諸君若し此書に記する所の他疑の質すべきものあらば、幸に一報の勞を吝む勿れ、再刊の時其欠を補はん、是余が切に看者諸君に望む所なり、

千九百一年十月

甲府天主公教會に於て

ドルワル、ド、レゼー識

解疑第一篇目次

○宗教に就ての難目

(一) 世に宗教程無益なるもの無し……一頁
(二) 宗教は只安心の法のみ……二頁
(三) 宗教に依らずして人生の目的を達するを得べし……四頁
(四) 宗教は治國の具たるに過ぎず……五頁
(五) 開明の世に宗教の要なし……七頁

○天主教に就ての難目

(六) 天主教も亦た先哲の案出せるもの而已……一二頁
(七) 何れの宗教も奇跡の如きものを有す……一五頁
(八) 宗教は皆な勸善懲惡の道なり天主教のみ眞正の宗教といふを得ず……二一頁

(九) 人道を全ふすには孔子の教を以て足れりとす何ぞ天主教を要せんや……二四頁
(十) 天主教は社會と併進せず……二六頁
(十一) 天主教は頑固守舊の道なり……二七頁
(十二) 天主教は忠を教ゆ……三〇頁
(十三) 天主教は祖先を辱しむ……三三頁
(十四) 天主教は愛國心を滅却す……三五頁
(十五) 未來を說くは天主教のみに限らず……三七頁
(十六) 天主教の愛は禽獸にまで至らず……三九頁
(十七) 天主教は非難多き宗教なり……四三頁

○神に就ての難目

(十八) 神無くんば却て幸福なり……四六頁
(十九) 神、儒、佛共に無上の神一あり……四八頁

(二十) 神は理体あり……四九頁
(二十一) 天主と造物主とは別物なり……五三頁
(二十二) 造物主は何の要ありて存在するか……五四頁
(二十三) 造物主を造りたる造物主あるべし……五五頁
(二十四) 宇宙も神の造りしものならば之を造る前神は何れに居りしか……五六頁
(二十五) 造物主の全能は何を以て證するか……五七頁
(二十六) 天主は全能あれば惡を爲すと、一と一を加へて三と爲すことも自由なるべし……五八頁
(二十七) 全能の神なりとも虛無より萬物を造出すこと能はざるべし……六〇頁
(二十八) 天主が虛無より萬物を造りしは無を有にしたるに同じ無法と云はざるを得ず……六四頁
(二十九) 微小なる人間の爲に廣大なる宇宙を造られたるは權衡を知らざる神なり……六五頁
(三十) 全智なる造物主が何故有害無益の物を造りしや……六七頁
(三十一) 天主が不具者を造るは憐に於て缺くる所あるさや……六九頁
(三十二) 天主が萬物を造りたる目的は之を解するに苦し……七四頁

(三三) 天主は善人を造りて天國の賞を與ふる目的ならずや、然るに其目的に反して惡を爲し地獄に墮るもの多きは何故ぞや……七六頁
(三四) 天主は人の惡事を抑止すること容易あり然るに其爲す儘に放任するは暗に惡事を贊助するに異ならず……七九頁
(三五) 天主が己れの意に適はざる地獄に墮るが如き人間を造りしは未來を知るの明なきものならずや……八二頁
(三六) 人の行爲は神の聖旨に依るといふ、然るに何故或ものは天國に往き或るものは地獄に墮るが如き不公平あるや……八四頁

以上

解疑第一篇目次終

解疑第一篇

佛人　ドルワール　ド、レゼー演說
日本　林　壽　太　郎筆記

(一)或問、世に宗教ほど無益のものは無いと思ふ、

解答、宗教が無益であるか否といふことを決めるには、先づ宗教は何ういふものであるかとゆふことを決めねばならない、只一概に無益だといふは誤謬である、ソコで宗教の定義を下して見ると神と人の關係を致る學問である、故に若しも神が此世にないならば其關係も無いものであるから無論宗教は無益なるのみならず大害物である、之に反して神が有るならば人間は何うでも其本なる神と大關係が有る、隨て宗教は最も人生に必要のものと云はねばならぬ、されば宗教が無益であるかあいかを知る爲には神即造物主は實際存在するものか否を研究して後に決定すべき問題であるのです。

(一) 世に宗教程無益なるもの無し

（二）宗教は只安心の法のみ

（二）或問、宗教は神と人の關係を教ゐる學問だといふ定義は天主教者の勝手に決めたのである、本來宗教は安心の法であるから如何ある宗教でも之を信じて安心が得られるならば皆それは眞正の宗教といはなければならぬ、

解答、此質問の意味を裸体にして見るならば、宗教は人に安心を得させる方便に過ぎない、吾人々間を甘く誑すやうに出來て居ればそれで立派の宗教であるといふのです、心に安全を得らるれば虛僞でも方便でも眞の宗教であるといふは頓だ間違である、それは只上手に出來た虛僞で僞教と云はなければあらぬ、試みに問者の筆法を借りて他の事を論じて視よ、如何に面白い考へであることよ、例へば茲に日本の地理を知らない愚なる東京人があつて、該人が急用で函館に旅行せんと或人に順路を聽いた、すると先生は餘程惡戯を好む性質と見ゐて、函館に行くには新橋から滊車で廣島に行き、其處から船で厩島に渡りあさい、函館は其近在であると教ゐた、斯く欺かれて安心して旅行したならば如何、其人は如何に喜ても安心しても其結果は金と時を浪費たのみ

で目的地に行れないといふ大損害を蒙ひるであらふ、又茲に一万圓の通貨を所有居る人がある、其人が甘く誑されて既に破產かゝつて居る銀行へ其通貨を預け入れたとして視よ、該人は如何に確實な銀行だと信じて安心して居ても、其銀行の破產と共に所有の財產を失つて仕舞といふ結果に至るのである、心だに平安を得られるならば虛僞でも方便でも苦しくあいといふ考は何と面白結論を得るではないか、斯くまで愚かな人は決して無らふと思ふが、宗教に就ては直に斯の愚說を唱へるといふは不可思議千萬ではないか、肉体に關係する金儲や商買や病氣などに就てはあか〳〵欺かれないやふに注意しながら、何せ靈魂の行末に就ては心配せないだらふか、問者の如きは態々誑されることを望むと同じで失敬ながら可哀相だといふの外はない、

眞實にいへば宗教の目的は今世に於て身を修めると、來世に於て助りを得るといふ二つである、然るに不完全、或は謬說の道德を教える宗教を以て身を修めることが出來やうか、來世の助りを得る道を教ゐない宗教を以て助りが

(三) 宗教に依らずして人生の目的を達するを得べし

得られやうか、云ふまでも無い何方も得られない、近く曰へば眞の道德は一つであるから宗教も一でなければならぬ、來世の助りを得る道は一であるから、來世の助りを得させる宗教も一でなければならぬ、故に頑狂者でない限りは、其一の道一の宗教を誑されないやふに詮索することは他まで心配すべきことである、若し心配せぬならば如何程安心して居ても究極は大なる禍難を蒙むらなければならない。

(三) 或問、宗教に依らずとも人間の目的は達しられるから宗教は無用の長物である、

解答、一般の教外者がいふ如く、人間は完全なる猿の一種であるならば、成程着る、飲む、食べる、眠むる、遊ぶ、金を儲ける、喧嘩する、不品行するなどのとが目的であるから、斯やふなる立派な目的を達する爲には無論宗教は不必要であらふ、けれども幸か不幸か人間は禽獸と其性質が全然異ふ、不滅なる靈魂を具へて居る、故に今世眼前の目的の他、來世永遠の目的が有る、されば果して來世が有るか無いか、換言ば不滅の靈魂を具へるか具へぬかといふと

を研究して之を明にせぬ中は宗教に依らずして目的を達することが出來るとは云はれない、況して無用などゝは猶更云はれない。

(四) 或問、宗教は國を治める一の道具である、故に國が治まりさへすれば宗教の必要は無い、

解答、一の原則を立てるには其證據を擧げねばならぬ、證據も擧げずして、彼是いふのは獨斷で何にもならない、今問者が宗教は國を治める道具であるといふ前提は、問者の獨斷で之を以て議論の基礎とすることは出來ぬ、何せなれば其證據が一つもないから、然し兎角證據の無い議論を以て宗教を非難するは無宗教家の惡風である、ルーソーも矢張問者と同一論者であるが彼の如く詳細に論じたもの、書物を調べて見ても、宗教は國を治める道具であるといふ證據は一も擧げてないのを見れば斯やふなことは人間の想像説である、斯やふな論は敢て答へるの必要は無い、然しながらこれは隨分流行する非難であるから少しく答へて置かう、

(四) 宗教は治國の具たるに過ぎず

（四）宗教は治國の具たるに過ぎず

宗教が國を治める道具ならば、先づ此道具を發明した國又は人は誰れなるや、之を用ひ始めた國は何處で凡何千年前に發明したか、之を知つて居る先生は一人もない、論者も之には答へられないだらふ、凡そ如何なる道具でも工夫でも珍しければ珍しいほど之を發明した話は人に知れ渡る筈である、然るに宗教といふ道具を發明した話だけ知られないのは何せであるか、猶又如何に開化なる國でも野蠻なる國でも皆此同じ道具が有る、往昔の歴史を調べても、宗教の無つた國は一もなかつた、何千年を隔て何千里を離れて少しも交際しない國々が何うして同じ道具を發明することが出來たか、凡そ四百年前コロンブスが亞米利加を發見したときにも、其土人に皆宗教がわつた、又凡四十年前スタンレーが始めて亞非利加の中央を探險したとき、其野蠻な土人に矢張宗教があつた、是等の事實は宗教が決して人の考へた道具でなくて却て宗教を信ずるのは人性であるといふことを証據して居る、人間は神を信ずる動物であるといふ哲學の定義は眞理である、又國が治まれば別に宗教の必要は

無いといふ考をする人は聊も世界の歴史に通じないといふ徴である、往古から世界萬國の歴史を研究すれば、宗教が隆なるほど國が治まり、衰へるほど治まり難い、又宗教が無くなれば國も共に亡びて仕舞といふことは何よりも明かである、實は右の如き難問は答へ易いが、斯やふな難問する人に解らせることは六ケ敷、其の理由は二つある一は斯やうな難問をするのは情が捩れて神を態々捨ること、總ての宗教を破却ことを飽まで決心して居るといふ徴であるといふこと、二は此難問は國を治めること即政治に關係して居るから際限なく上手な理窟をいふことが出來るといふ二つである、斯ふな人は此世から神に捨てられた廢人で致方がない、

（五）或問、

人間は學問のみを以て行を立てることも社會を進歩させることも出來る、故に宗教は學問の開け無い野蠻時代には必要であるも開化して後は必要の無いものである、

解答、

此說は隨分世間に流行したものであるが、之は開化といふことに關係する難

（五）開明の世に宗教の要なし

問であるから簡短には答へ兼ねる、何せなれば今の日本國に稱へらるゝ開化といふ語は其意味が甚だ曖昧だからである、

開化とは實驗學に依て益有形世界を研究し知識を開き生活を安樂にし肉体的の幸福を增すこと、委しく云へば珍しい器械を發明したり、海陸軍備を擴張したり、司法行政を整へたり、商業貿易を隆昌にしたりするといふことのみなれば、成程宗教は必要の無いものであらふ、然しながら斯る有形的の開化が眞の開化であらふか、缺点のない開化であらふか、人間といふものは肉体ばかりでない、而て其具へて居る智識は實驗學に屬すること斗りを悟るものでない、其智識は無形なる心靈の働きであつて、實驗學の研究することの出來ない無形にして高尚なる理論を悟るの能力を有つて居る、又心靈は此智識の外情を具へて居る、而て望むだり、愛したり、嫌つたり、憎むだり、娛むだり、悲むだり、なぜする、シテ見ると眞理とか、道德などの如き目に見へない高尚な理論や、情の能力などのことを一向摶はぬ開化は何う考へても狹隘して不完全な開化であることは疑ひない、然らば眞正の開化とは何であるかといふに、此世に生れ來る人間が成るべく殘らず完全なものに成るといふことである、即人間の具へて居る總ての德、能力が其性質に適當する働用を爲すといふことである、詳言へば智識の本性は眞を悟るといふことである、故に眞を悟るほど智識の開化が進むだのである、之を以て非眞即僞の學問を悟るの智識は如何に深くとも其性質に反することであるから其智識は野蠻たることを免れない、情の本性は美と善に感じて之を好むといふことである、故に醜と惡に感じて之を好むの情は是亦た野蠻たること疑ひない、又肉体の本性は主なる靈魂に從ふので即智識の悟つたる眞と情の感じたる美と善を守るといふことである、故に其眞と美と善に背くの行あらば、其肉体は如何に强壯でも其働作は野蠻である、是は事理明白ではないか、之を以て見れば眞正の開化人といふには智識も情も肉体も三束揃はなければならない、智識が何程深くても、情が傲慢で自愛のみ深く、肉体の行が不義不德斗りで

あるならば、左様な人は却て社會を害する野蠻人である、

次に問者は學問のみを以て行を立てるといふが其學問は何であるか、物理、化學、天文、地理、言語の如き有形的の學問は情の開化の爲に何の益も無い、是等は道德に何の關係もあい學問である、然らば教育、道德の如き學問であらふか、若し其が眞正の教育、道德學ならば勿論同意である、さりながら問者に反問すべきことが一ある、即教育、道德の本は何であるか、日本現時の先生方、或は孔子流の支那先生、或はルーソー、スペンセル、ショッペンホーエルの如き西洋派の諸先生が考へた想像を本としたものであらふが、彼等は同じく是人である、同類なる人間に何をも命ずるの權利が無い、吾人も智識がある、故に彼等と同じく想像說を考へ出すことが出來る、異つたる教育道德を主張することは吾人の自由である、斯く教育道德が人間の考を本にして立てられるならば教育道德は風の如く國に由り時代に由り、政治に由り、社會の盛衰に由て如何樣にも變るものである、斯の如く變るものが何の益を

爲すか、日本に於ては明治以來三十余年間其教育の方針は幾度變つたか、某教育家に親く聽いたが日本教育の方針は文部大臣の更迭と共に絕ゑず變ると此こと果して眞なるか否は知らないが、兎に角く斯く曖昧なる方針の教育あらば無論眞正の開化を作ることが出來ない、社會を進ませることは覺束ない、何う考へても教育とか道德とか、又凡て人間の行ふべき所に就ては、確固として動かざる巖の如き基礎が無ければならぬ、又如何なる工夫でも逃れられない制裁が無ければならぬ、何せなれば風の如く屢變る規則制裁の無い規則は有て無きが如きものであるからだ、此動かない基礎、免れられない制裁の二は永遠なる造物主の外に決して無い、宗教は造物主と其性質、萬物を造つた目的、人間に對しての其權利、其制裁等の重い理由を教ゑる學門である、依て行を立てる、又社會を進ませるに最も必要なる學問は宗教に相違ない、モンテスキューといふ社會學者がいふに、學問が開けるに從つて人間の自由權利が發達する、故に國が開けるに從つて宗教は必要であると、モンテスキ

（六）天主教も亦た先哲の案出せるもの而已

ユー又曰く人民に法律を能く守らせる爲には數十人の巡査も其効力一人の天主教師に如かずと、是は大に味ある比喩である。

（六）或問、天主教は昔の大學者大智者の案出したものであらふ、故に他の宗教と同じく人間の想像にして僞教である、

解答、天主教の大体を聽いて其旨意、其歴史、其證據などを能く知らなければ他教の如く詰らぬものと思ふであらふが、能々研究したならば決してソウで無いことが知られる、

天主教が人の想像でないといふ證據は二ある、一は其教ゐる道德が完全である即ち身を修めることと、換言ば造物主と他人と已れに對して守るべき行に就て足らないこと、誤謬なことを決して認ることが出來ない、斯やふに完全な道德を定めることは人間の力に及ばないといふこと、二は耶蘇基督の降生、今より千九百年前より天主教に於て信ずべきこと、行ふべきことが全く固定して居て時と處とに由り、又は政治や世の風潮に由て變遷やふなことが決して

無い、斯く岩の如く堅固な道は人の案出したものでない、人の想像に由て立てられた總ての道德的、社會的、教育的、政治的論說、は千九百年前より何百度變遷たか知られないほどである、本來變遷といふことは人智より出た證で、不變といふは神の全智より出たといふ證である、此不足誤謬の無いと、萬古不變といふ二つのことが明かに神より出た宗教といふことを證據して居る、

天主教が造物主より直接に啓示られたといふ證據は其他にも尙澤山ある、其證據を悉く委しく陳べやふならば一冊の書物でも書き盡されないから茲に其主要なるものだけザット擧げやふ、

第一は豫言、第二は奇跡、第三は基督の復活と昇天、（此三つの證據は眞理の本原第三篇に通俗的解釋あり、又事跡以前以後の歴史に一層高尙に綿密に解釋あれば就て看られよ）第四は天主教の擴張、第五は天主教の布教、第六は天主教の社會に及ぼした感化、の六つである、ソコデ第四の天主教の擴張と

（六）天主教も亦た先哲の案出せるもの而已

（六）天主教も亦た先哲の案出せるもの而已

は如何なる勢力がわつて社會に擴まるかといふので、天主教は人間の私慾、即傲慢、邪淫、貪慾の三を殿しく抑へる道であるから人間の情に最も反對する、故に人々は之を嫌て如何なる時代でも如何なる國でも酷く天主教を迫害ないものは無い、若し人間の立てた道ならば斯くまで腐敗した社會に反對して擴まるやふな不思議な勢力は決して無いといふこと、次に天主教の布教とは、即人望もなく財産もなく勢力もなく、學問もない卑ひ漁師など十二人の弟子に由て世界中に擴まつた、此驚くべき結果は實に人間の力でなくて神の力に因てゝわるといふこと、次には天主教の社會に及ぼした感化、一言に約めていへば世界を眞の開化に導いたといふことは基督降生前と後との世界の狀勢を比べて見たならば明かである、降生前の世界に於ては人間を敬ふことも憐びことも無つた、畢竟道德が無つたのである、一方なる政府、君、親は無上の權利を有つて居て他を壓制する、一方なる人民、臣子は權利も自由も全く無い奴隷で、其生殺與奪の權は他の手の中にあつた、又正當婚姻と

いふものはなく、婦人は男子の玩弄物であるといふ姿であつた、然るに基督降生後は世界は俄然轉覆で卑い人間までも其貴い所以が分つて、奴隷は廢められ、人の命は貴ばれ、婦人の位置は上げられ、人爲的の階級は打破られ、學校病院を立てゝ、一般の人民を悉く同一に教育し、貧民を憐むといふやうになつた、一言以て之を蔽へば國家は法律を以て一般人民の生命、財産自由を保護するやふになつたのである、之は歷史の明かに證據する所である、然るに尙天主教は人間の想像であるなどいふ人は心の不正直な盲目者といふの外はない。

（七）或問、宗教には皆な不思議な分らぬ話がある、然し其は皆道理を以て解らぬこと、實際に行へぬことのみである、天主教も矢張其通りで奇跡といふやふな不思議なことがある、之は人に信じさせる爲に拵へた、眞らしい僞であらふ、

解答、宗教には皆奇跡といふやふな不思議な話があるといふは眞實である、然しそれは奇跡といふべきものか何うかと研究するには先づ奇跡とは何かといふ定

（七）何れの宗教も奇跡の如きものを有す

（七）何れの宗教も奇跡の如きものを有す

義を明かにせねばならぬ、多くの人は奇跡とは人力に及ばないことであると思ふて居る、此は眞の定義らしいけれども、未だ以て定義とするには足らない、實際からいへば奇跡は有形世界の普通の規則に合はないことである、例へば藥を用ひずして只一言に大病を治癒するとか、眞實に死だ人を蘇生せるとか、水の上を歩むとか、いふやふなことが奇跡である、ソコで斯の如き有形世界の普通の規則に合はないやふなことが果して出來るか出來ないか、斯やふなことは不可有の事として悉く虛僞と決めるがよいかといふことを陳べなければならぬ、先づ疑ひないことは眞正の奇跡は人間の力に及ばないといふことである、何せあれば人間は有形世界の規則、力を悉く知り得られない、只其一端を知るのみである、又其知り得た力さへも思ふがまゝに使用ことは出來ない、否寧ろ人間は有形界の規則、力に羈束れて居る其奴隷であるからである、然らば造物主にも矢張人間の如く出來ないことであらふか、若しも造物主に出來ないといふ者あらば、請ふ其理由を示せ、吾人は出來るといふこ

とのみならず、極めて容易ことゝいふ、造物主は無遍である故に全能にして能はざる所なきものである、殊に萬物を無き所より造り出し而て其萬物の力、規則、運動、一言を以て云へば世界の秩序は皆造物主の自由にれ定めなされたものである、若し造物主が今の世界と總てが異ふ所の世界を造る聖旨であつたならば異ふ世界であつたであらふ、然らば世界の力、規則、秩序などを一旦お定めに成つた以上は今更之に背くことは出來ない、何うしても之に從はなければならぬと云ふ理由は無いではないか、國王が重大理由に因ては法律に背くことが出來る、是れ國王は主權者にして法律は自らが裁可したものであるからである、例へば法律に依て死罪を宣告された罪人に特赦令を發して其死刑を免すことあるは往々見る所である、然れども之を見て不道理と思ふものは一人もない、然らば何敎に世界萬物を自ら造られたる造物主が理由あつても万物の規則に育くことが出來ないといふか、人間にすら行ひ得らるゝことを造物主に行ひ得られぬ筈は万々あい、造物主の自由權が國王の自由

（七）何れの宗教も奇跡の如きものを有す

（七）何れの宗教も奇跡の如きものを有す

權より少い所以が無い、之を以て見ると一旦定めた万物の規則には造物主と雖も背くことは出來ないといふ人は論理を知らないものである、

尙又論歩を進めて一層廣く考へて見れば造物主の爲に奇跡は出來易いことのみならず、是非とも無ければならぬことである、何せなれば奇跡が無いならば眞の宗教を證據することが出來ないからである、造物主が吾人に何かを啓示たまふも、何かを命じたまふも、それが造物主の眞の啓示である眞の命令であるといふことを證するものが無いならば、吾人は何に因て其眞なることを信ずべきか、又其證據が世界万物の普通の規則に從つて行ふものならば、吾人は何に因て造物主の所有であるか、人間の所爲であるかを識別やふ、之を以て造物主の手爲あることを知らせる爲には是非とも人間の爲すことや有形界の働きの外でなければならぬ、普通理法の外の所爲でなければならぬ、故に奇跡が出來ないといふことは恰も造物主が人間に啓示こと命令ことが出來ないといふに同じである、されば眞正の宗教を知らせる爲には何うしても

奇跡が必要である、換言ば奇跡のある宗教が眞正の造物主の道である、

斯く論じて見ると茲に眞正の奇跡即造物主自らが成す特別な所爲と又其似て非なるのもとを識別といふことが必要である、何せなれば問者自らも云ふ如く總ての宗教に皆此奇跡らしいものがあるからである、ソコで前にもいふ通り眞正の奇跡は人力に及ばない所爲、有形世界の普通の規則に合はない現象である、而て普通の規則といふのは無學文盲な人迄で一般に知て居る規則といふ意味である、例へば眞に死んだ人は再び復活せないといふは普通の規則である、依て若し眞に死んだものが復活するといふ現象は有形界の力でなく必ず世界万物を自由に用るもの即眞の神が顯し給ふた現象である、若し之に反して近頃發見した X 光線の如き物体を透して中を見るといふは如何にも不思議にして奇跡の如きである、けれども斯やふなことは學者の眼から見れば不思議ではない奇跡とするに足らないのである、殊に世界には普通の規則、力の他此の X 光線の如き未だ人に知られないものが如何程あるか知れぬ、

（七）何れの宗教も奇跡の如きものを有す

故に極々嚴密な研究を遂げて後でなければ、假し不思議と思はれても奇跡とは定められない、天主教に於ては奇跡らしいことがあつても信者は勿論司祭、司教までも之を判定の權利がない、若し左樣なことが有つた場合には之を羅馬の教皇に屆出で昔から定められた嚴密な規則に從つて充分な研究を遂げ、而て後教皇親らが裁斷するのである、

其規則はあか〳〵澤山あるが今其一班を擧げれば

一、眞實の奇跡は公でなければならぬ、即公衆の前に顯はれたことでなければあらぬ、內密にあつたことあらば僞とすべし、

二、眞の奇跡は其結果が長く持續なければならぬ、例へば癒つた病氣が忽ち再び起るやふなことがあつてはならぬ、

三、眞の奇跡は一點も疑ひ無いものでなければあらぬ微少でも不審に思はれる條があれば僞と決めねばならぬ、

四、眞の奇跡は全善なる造物主の所爲であるから何うでも眞、善、道德に外れぬことでなければならぬ、若し微少でも僞、惡、不道德に係はる所爲ならば如何程不思議でも決して造物主より出るのでない、是は多く惡魔の工夫である、

五、如何程不思議な所爲でも眞の奇跡であると輕忽決めてはならぬ、何年もの間能々調査て後決めなければならぬ、

此他尙之に類する規則が多くあるが、是等の規則に照し、是等の規則に從つて教皇が奇跡であると決めたならば、其眞なること決して疑ひない、世には斯くまで嚴密調査た事實や歷史は一切ない、それでさへも歷史を疑ふものは一人もない、然るに何故斯くまで嚴密規則に依て調査たことを疑ふか、其理由は自己の道德、行に關係するからである、眞の奇跡だと承知すれば、隨て眞の宗教と承知して、其宗教を守らなければならぬといふ結論に達するのを忌むのである。

（八）或問、何れの宗教も皆勸善懲惡の道でないものは無い、然るに天主教を除くの外他の宗教は僞教であるといふは餘り勝手なる申分でないか、

（八）宗教は皆な勧善懲悪の道なり天主教のみ眞正の宗教といふを得ず

解答、他宗教は誤謬の善、不完全の善に導くから僞教といふのである、何れの宗教も勧善懲悪の道であるとは云はれあい、他の宗教は己れの善とする所を人に勧め、己れの悪とする所を人に戒めるといふに過ぎない、而て己れの善とする所果して眞の善なるか、又己れの悪とする所果して眞の悪なるか、といふに決して然りといふことは出來ない、試みに神佛二道を視よ、其信ずる數多の神佛は眞の神であるか、眞の神は唯一である、故に僞神である、僞神を拜むは善でないのみならず大悪である、又彼等は人が死んで神佛に成ると教へるけれども、今日の進歩したる學問に因て物の種類の變ずること出來あいは明かである、されば化神成佛の教は眞理に背き人を愚にするもので無論悪道である、

又回教は多數の妻を娶ることを許す、是は眞の道德に背くこと明かで悖德の道である、

又日本に於て新教と稱する基督教では夫婦の離縁を許す、けれども是は基督

の厳く禁じた所であるから悪である、又社會の爲にも大なる弊害を爲すものである、

又日本に於て正教と稱する露教は基督が教皇に與へた特權を捨て煉獄を無いなどゝ教へるから是亦た不完全なる基督教である、

是等は主もなる宗教に就て其一班を擧げたるに過ぎないが、己れの善とする所必ずしも善でないといふことを證するには充分であると思ふ、

以上陳ぶるが如く總ての宗教が其信ずる所或は行ふべき所に就て多少の差ひあるのみで誤謬缺點の無い宗教は無い、それで他の宗教を僞教といふのである、總ての宗教中最も大なる誤謬あるは神佛二教の如く數多の神を信ずるもの、又一神教の中で最も大なる誤謬あるは回教である、彼の宗教は救世主を信ぜず、又道德を破壞して人を不品行に導くものである、基督教の中最も誤謬のあるは新教で、これは自由研究といふ愚説を基礎として立てられたものである、故に信仰も行も一定せずして各自の勝手である、それで新教は益

（八）宗教は皆な勧善懲悪の道なり天主教のみ眞正の宗教といふを得ず

（九）人道を全ふするには孔子の教を以て足れりとす何ぞ天主教を要せんや　二十四

分派に分派を生じ今日既に何百といふほど其派が分れた、是等の諸派中、最早宗教を以て目るべからざるものが三分の二以上もある、多くの基督教中眞正の基督教に最も近いのは希臘教と露教である。

（九）或問、孔子の教を守れば人爲るの行に不足は無いと思はれる、天主教を信じなければ全く人間の道を踏むことが出來ないとは少と受取り難くい、

解答、孔子は聖人であらふ、然しながら其教は完全無缺であらふか、其教を守れば人の行に不足ないといふのは其教が完全無缺だといふに同じである、果して問者のいふ如く完全であるか或は缺點があるかといふことを明にするには、教の定義を決めるが捷徑である、元來教とは何であるか、人間の本原と終末、即人は何處から來て何處に往くかといふこと、及萬物の原因なる造物主と其性質、人間と其關係、又人間が造物主に對し、他人に對し、己に對しての義務などを解明す學問である、ソコで孔子の書物を見ると天とか上帝とかいふ言語は折節書いてある、けれども其天なるものは如何なるものか漠然

として居つて、其性質が分らぬ、又之に對して直接の義務を教ゐぬ、況して未だ生を知らず焉ぞ死を知らんやと明言してある通り人間の行末などに就ては猶更教えぬ、只其教ゐる所は他人に對しての務斗りである、之は宗教といふべきものでない、孔子は決して宗教の開祖でなくて道德學の先生である、孔子の教に如何程立派な道德說があるといふても、現世に行ふべき義務、又來世吾人の歸着する禍福の爲には最も不足な道である、猶又儒教の道德は誤りがある、妾を蓄へることを禁せず、夫婦の離縁を許すなどは其中でも最もなるものである、故に未開の國では儒教を以て何うにか道德を維持こと が出來やふが、死后救靈の爲には何よもならない、本來人間は如何ある學者でも聖人でも、誤謬、缺點を免れない、完全なものは永遠にして無遍なる造物主の他にない、故に造物主の立てられたる道を除いては缺點、誤謬、虛僞の無い教はない、それで天主教でなければ全く人間の道を踏むことが出來ないといふのである。

（九）人道を全ふするには孔子の教を以て足れりとす何ぞ天主教を要せんや　二十五

（十）天主教は社會と併進せず

（十）或答、人間は社會を成して接むものである、故に道德は社會の幸福を增すを以て目的とせねばならぬ、然るに天主教に於ては社會の風俗習慣を打破るやふなことを敎ゐ、決して社會と併行で進まない、

解答、社會の開進む、智識、學問、道德、行爲、幸福の進歩することは人性である、是は素より喜ぶべきことで天主教の最も贊成する所である、然しながら人間は其生來で情が惡に傾向て居るから、眞の目的とすべき高尙なる無形上のことを忘れて、肉体的の有形界にのみ牽引れ易い、それで天主教の敎ゐる所が社會の風俗習慣に逆ふて無理のやふに思ふのである、所謂是が良藥口に苦く忠言耳に逆ふといふものだ、天主教は社會の眞正の幸福を望む天啓の案內者である、故に如何ある風俗習慣でも社會の爲に害ある、道德の爲に危いものは、決して寬容ない、全く之を廢めさせねば置かぬ、若又風俗習慣が社會の爲に善良ものであれば、ます〳〵之を贊けて進歩發達するやふに努力するのである、

天主教が社會の幸福を進ませる障碍物であるといふ考をするのは、歷史を少しも知らないからである、學校、病院を創立たものは誰れであるか、女子教育を創始たものは誰れなるか、鰥寡孤獨を憐むで養育院育兒院を立て始めたものは誰れなるか、瞽者啞者に同情を寄せて之が敎育を創めたものは誰れなるか、是等創建者は各國の政府なるか、學者なるか醫師なるか、決して彼等の創見でない、是等は皆天主教の司祭若くは修道者の創めたのである、彼等は天主教の敎旨を事實に表現したのである、直言へば天主教の敎旨から出た利益ある發明、慈悲なる所作が無つたならば、社會は基督降生前の如く、殘忍なる野蠻なる風俗習性は今日尙ほ如何程存するか知れぬといふことは歷史が證據するのである、故に忌憚なくいへば右のやふな論を以て天主教を難するのは恰も父母の慈愛を考へず高恩を忘れて不孝をする子女と同じである。

（十一）天主教は戒國守嚴の道なり

（十一）或問、天主教に於ては信ずべきことと行ふべきことが古來確一で、毫も進歩せぬ、斯

（十一）天主教は頑固守舊の道なり

く頑固守舊道は智識の進歩、社會發達の障碍物である、

解答、概していへば非難をする根元は多く言語の意味を明にせぬからである、今問者の所謂進歩といふ言語は何ういふ意味であるか、不完全より完全に進むといふ意義と、誤謬、虚僞、不義、不道理なことを改めて正確、眞實、正義、道理に引直すといふ意義もある、例へば無學な人が學問するとか、血清療法のやふな最新醫術を發見したなどは、不完全より完全に進むだのである、又日本に於て刑罰に拷問切腹を廢したこと、或は遠賓の生物進化説の僞あることを實驗に由て確めたおぞのことは、誤謬虚僞を正確、眞實に不義、不道理を正義、道理に改良したのである、是に依て進歩といふことには種々ある、增補的進歩、改良的進歩、又之に事的と物的といふやふに細かに碎けばなかなか多い、所で天主教は一言にいへば神人の關係を解明す學問である、故に右の如く非難に答へるには先づ學問の進歩といふことに就て論じた後でなければならぬ、ソコで同じ學問の中にも進歩することの出來ないものと、大に

進歩すべきものとがある、例へば數學、幾何學の如きものは、其多くの定論が全く明確に解つて完全に達した學問であるから、增補も改良も出來ぬ、最早進歩せぬ學問である、又地質、天文、醫學などは解つた所が隨分多いといふても未だ發見れない所がなか〳〵澤山である、隨て不完全にして誤謬、虚僞の點もあること疑ひない、故に益改良進歩すべき學問である、之に依て見ると進歩といふことは換言れば不完全である虚僞、誤謬があるといふ意味だ、而て天主教は他宗教の如く人間の立てた道ならば何うしても不完全で、虚僞と誤謬があるから改良し進歩しおければならぬ、若し之に反して天主教は造物主の立て給ふた天啓の道であるならば、造物主は全智全善なる御者であるから、虚僞も誤謬もなく、不完全、不道理な道でもない、故に決して進歩、改良の出來ない性質の者である、之を以て要は唯天主教が果して天啓の道であるか否を明めるにあるのみだ、天主教は問者自らもいふ如く古來確一の道で少しも變らない、微り進まない、これ明かに進歩改良すべき欠點

（十一）天主教は頑固守舊の道なり

誤謬の無い完全の道だといふことを證するもので天主教の爲には此頑固守舊といはれるのは却て榮譽である、風位の變る如く變る人間の想像より出でたものでなく常住不變の造物主より出でた道だといふことを優に表章して居るものである、而も尙問者は進歩せぬから舊臭いといふならば、數學、幾何學も同じく進歩せぬから舊臭い學問で社會の進歩を沮碍と云なければならぬ。天主教では君に忠を盡すといふことを明かに教ゐない、聖書にも忠義といふ文字は一ツ見へない、故に日本の如き忠義を貴ぶ國柄に合はない宗教である、

(十二)或問、

前年某文學博士も斯やふなことをいふて非難したが、これは天主教の趣意を知らないか、或は知つて知らない狀を爲るものか兎角貴い道を辱しめたがるより起るのである、天主義で忠義といふことを教ゐるか教えないかは天主教信者なれば誰れの手許にもある公教要理と題せる一小冊子を取つて之を繙くが一番捷い、該書の中天主の十誡といふものがある、其第四誡の汝父母を敬ふべしといふ箇條の解釋を見よ、

解答、

○父母の他に誰れを愛し敬ひ之に遊ふべきや、

▲養父母、師匠、主人、及政府に於ける長上を愛し敬ひ之に遊ふべきなり、

斯やふに書いてある、この愛し敬ひ之に順ふといふことは完全な忠義である、又聖書に忠義の文字が見へないと問者はいふ、けれども文字の如何は問ふ所でない意義の如何が問題である、新約瑪竇傳二十二章二十一節にセザルのものはセザルに歸し、神のものは神に歸すべしと基督が仰せられたことを記してある、セザルとは時の羅馬の天子の名である、其意味は天子に盡すべき務は天子に盡し、神に盡すべき務は神に盡せといふのである、又使徒保錄が羅馬人に贈れる書十三章七節に、總て受くべき人には之を與へよ、貢を受くべきものには之に貢し、稅を受くべきものには之に稅し、恐れべきものには恐れ、尊ぶべきものは之を尊べと書いてある、其意味を約めていへば忠義を盡すべき人に對しては忠義を盡せといふのである、猶又一歩進むで考へるに、何故忠義を盡さねばならぬかといふ原因が確固とすれば忠義心は從て深くな

（十二）天主教は忠を教ゆ

らねばならぬ、所が日本の歴史を見れば忠義を尊ぶ國柄であるといふことは事實に表現て居る、感服するほど忠臣、義士の談に富むで居る、然しながら其忠義の由來る根原を繹ぬれば、或は感情から、或は習慣から、或は名譽心から、或は義理づくから來たので、畢竟有形的、世間的の原由に過ぎない、斯の如き原由から來る忠義は時勢に迫れて厚くなり薄くなることを免れない、明治以後忠義の衰へたといふは其の著しき例證である　之に反して其根元が不動不變の造物主であるならば之を信じ之に從ふ人々の忠義は決して時と共に浮沈ある變がない、然らば造物主より出るの忠義の根原とは何か、保錄が羅馬人に贈れる書十三章一節に書いてある、神より出でざる權なし、總て有る所の權は神の立て給ふ所なり、此故に權に逆ふものは神の定に逆ふなり、背くものは自ら其罪の罰を受くべしと、此語に依て見れば總ての權、親でも君でも政府でも官吏でも師匠でも一切の權利は造物主より出たのであるから之に從ふは神に從ふに同じく、之に背くは神に背くに同じだといふのである、依て天主教の旨意を能く會得した信者が總ての權利者に對して盡す務の原由及目的は實に高尚で、無上至尊造物主の命令の上に立てられたのである、故に其忠義は岩の如く確固不拔にして時勢に伴つて變遷やふなものでない、斯く高尚ある基礎の上に立てられた忠義の他は悉く世と共に盛衰あることを免れない、之に依て見ると天主教は日本の國柄に合ないではない、却て之を信じ守れば明治以來忠義の衰へたのを昔のやふに而も眞に適ふたものに挽回すことが出來るのである。

（十三）或問、天主教では先祖の祭もせず、佛壇位牌までも取拂はせるが、是は先祖に對して不孝な仕打である、

解答、不孝とは何であるか、道理に從つて先祖、親を愛し敬ふの務を背くことである、されば不道理な愛や敬は之を廢止のが不孝でないのみならず却て孝行といはなければならぬ、ソコで神道佛教の教旨から、先祖を祭つたり、佛壇位牌を飾つたりするのを調べて見れば死んだ先祖を神佛として拜むのである、

（十三）天主教は祖先を辱しむ

此の道方は道理に背いたことではあるまいか、凡て物の性質といふものは變ずることの無いものである、人が死んだからとて性質の全然異つた神佛に成るべき筈がない、幾分か智識が開け、進歩した學問を覺へたものは斯る愚説は信仰するどころではない聞くにさへ堪へぬ話である、殊に父、禮も節を失へば非禮ありといふ古言の通り過ぎたるは却て及ばざると同じである、敬も過ぎれば不敬に成り、愛も過ぎれば惡むに同じだ、解り易く例へたならば、乞食非人のやふな賤しい僧が其親を國王の如くに思つて、國王に對するほどの禮を盡したならば何うであらふ、其子の心だけは嘉みべきである、けれども其所業は癲狂者の沙汰だと笑ふであらふ、親が死だれば神佛に成ると思ふも矢張同樣の癲狂者と云はなければならぬ、死んだ親が後世に於てソンナ大間違な敬方を見て斯くまで愚か子を產だのは耻かしいといふて慨くであらふ、天主教は造物主の立て給ふた道である、故に聊かでも不義不道理のことは容捨なく廢めさせる、それで死んだ先祖を神佛のやふに供物を献げ香花を立て、敬ひ拜むことを嚴しく禁ずるのである、子が其親を天子として尊むだならば眞正の天子に對しては不忠之より大なるはないであらふ、有限なる人間を神佛として拜むのは絶對なる造物主に對して其不忠不孝は之よりも大あるもので比べられない、といふて天主教でも先祖に對して道理なる敬は決して禁じないのみあらず却てそれは奬める所である、天主の十誡中第四に父母を敬ふべしとある、此父母といふは無論先祖をも含むで居る、故に道理なる敬は天主教の規則で之に背くは罪である、先祖に對しても適當なる敬と愛は盡さなければならぬ、要は只拜むことは眞の神のみに對して爲すべきことだから、先祖に對して拜むではならぬといふのである。

（十四）或問、天主教は愛國心を減却す

解答、天主教は愛國心を溥ちげるものでないか、

第一、天主教は來來を以て第一の目的とする、現世に於て罪を犯さなければ死後親ある造物主の許に往て大なる幸福を與へられると信ずる、それで現世

（十四）天主教は愛國心を減却す

の難儀、苦痛などには深く心を注めないやうに成る、又天主教を堅く守れば死後造物主に問されることは無いと信ずる、それで安心して一切を我親ある造物主の聖慮に任せる、之に依て心が強くなり死ぬことを懼れず惜まず、國の爲に生命を抛つことなども悦び勇むやうに成る、

第二、天主教に熱信なれば下等な心が無くなつて高尚な心にある、即出世したいとか、名譽を得たいとか、財産家に成りたいとかいふやふな有形的の幸福、野卑狹隘目的に牽引ない、それで己の肉体のことを忘れ、他人や國家の幸福を心底から望むやふになる、自愛よりも他愛が深くなる、由來愛國心の如きは極めて高尚な愛であつて、利己自愛の如き卑い了見のあるものには持つことの出來ないものである、殊に又天主教に於ては國を愛することは天主の命じ給ふた善德であると教ゐる、吾人が最も敬愛すべき最も深い恩を受けたものは國である、本國は我生を受けたる地、教育せられたる處、親子兄弟親類朋友の居る國である、己と同一習慣、同一言語、同一法律、同一人情

を具へたる民の集りである、又我祖先以來墳墓の在る地である、斯く深い關係を有ち、深い恩のあるものは現世に無い、それで天主教に於ては、自國が獨立を失ふが如き危急存亡の場合には親を捨てゝも自國の急に趣かねばならぬといふ規則を立てゝある、此規則を守らないものは眞正の信者でない、西洋諸國の歷史を見たならば此規則を事實に表章た信者の勳功談は澤山ある、是でも天主教は愛國心を消亡ものであるか。

（十五）或問、佛教にも地獄極樂の說がある、天主教にも亦た天堂地獄の說がある、未來を說くこと何方も同じであるのに佛教で助からぬといふは解らない、

解答、これは佛教と天主教のみに限つた話でない、如何なる宗教でも未來を說いて、死後行の善惡に因て賞罰を受けることを教ゐないものは無い、依て問者のいふ所に從へば如何なる宗教も未來を說くから助りを得られるといはねばならぬ、これが第一間違た考へである、次に天主教も佛教も未來の地獄極樂を說くから同じだとは云はれぬ、其說き方が全然違ふから矢張結果が違ふのであ

（十五）未來を既くは天主教のみに限らず

（十五）未來を説くは天主教のみに限らず

る、佛教には上智門に下根門といふて其説が二種ある、上智門に於ては現世は煩惱の苦縛を受けて永劫因果輪轉する、故に人若し現世の苦樂を煩惱と觀じて一切の習氣を出離れば死して成佛から再び現世に輪回することを免れると説き、下根門に於ては方便を專らとし、地獄極樂の謊誕無實を以て人の善惡を戒めるのである、ソコで此下根門の方便説は虛僞であるから論ずるに足らない、上智門に説く所の現世を煩惱と悟つて死ねば成佛するといふのは、取も直さず萬有神論である、又輪回托生の説はダルヴインの進化説と同じで、何れも物の種類と性質を辨別ない説で、眞理にも實驗にも合はぬ愚説である、此愚説より出た虛僞の未來説を如何程堅く信仰したればとて、眞の地獄の苦間を免れて眞の天國の幸福を得ることが何で出來やふ、否々人が假し眞の未來説を信じても未來の助りを得る道を知つて之を守らなければ天國に往くことは出來ない、眞の天國は造物主が與へ給ふ大なる褒美大なる幸福である、之を受けるには極まつた道が一つのみで之は造物主のみ定めたのである、吾

人々間は例へば受驗生である、受驗生には試驗法を定める權利がない、之と同じく未來の救靈を得る道を定めるものは賞罰を司り給ふ造物主の他はない、此故に眞の救靈を得るには、第一造物主の定めた天國、地獄の存在を信じ、第二に地獄を免れ天國に至るが爲に造物主の教ゐられた道と規則を守らなければならぬ、然るに佛教には右二つの必要なることが無いから其未來説は似て非あるもので斷じて救靈は得られない。

（十六）或問、天主教は愛の教だといふ、然るに十誡中動物の生命を奪ふことを禁じてない、佛教には、殺生戒といふて總ての生物を殺すことを禁じてある、之を以て見ると佛教は其愛禽獸にまで及ぶもので、天主教より一層博愛の道といはなければならぬ、

解答　佛教者の眼から見れば左樣な考へも起るか知れぬ、然し其が眞實であるか否を研究するには先づ愛といふことを考へねばならぬ、愛には道理なのもわれば不道理なのもある、いふまでも無く不道理な愛は眞の愛でない、ソコで人

（十六）天主教の愛は禽獸にまで至らず

が物を愛するといふことには、金錢を愛する、器具を愛する、田畠を愛する、耕作物を愛する、親兄弟朋友を愛する、若くは生國を愛するなど種々雜多の類がある、然しながら是等種々の愛の差異ある所は只厚薄といふのみでなく、全く二種の愛である、日本語でも之を區別して一を愛といひ、一を好くといふ、例へば器物飲食の類あらば之を好くといひ、人間の如き高等のものならば愛するといふ、而して時に或は金錢や器物や狗、馬の類を愛するといふものがある、なれども其眞義は嗜好の意にして眞の愛でない、尤も金錢其物を眞實愛する所謂守錢奴の如きは例外である、約めて云へば是等の愛は其物より出る利益を好むので其情の性質を分解して見れば毫も尊敬の分子を含むで居らぬ、眞正の愛は少くとも敬愛の心でなければならぬ、父母、妻子、鄕國を愛するのは此愛である、此愛情は自己の生命を拋つまでに發動することがある、而て此愛たる己れと相並ぶもの若くはより以上のものに對してのみ有るべきもので以下のものに對しては決して無い筈である、若しあれば不

道理にして何か情に蔽はるゝ所があるからである、何故人間は自然斯の如くであるかといふに、譬ひ佛教の如き謬說の爲に智識が蒙んだといふても人間に劣る萬物は人間の爲に造られたのである、人は萬物の長であるといふことを自ら其心に銘刻られて居るからである、之に依て人が道理に從つて世界の萬物を使用といふは却て造物主の聖慮に適ふことで開闢の時より定められた秩序であるといふことは少しく道理を解するものならば輙く首肯する所でありふ、而て道理に從つて使用とは、理由なくして感覺ある動物を苦めたり殺したりせぬといふことである、故に泰西の先哲もいふた、動物を殘酷に取扱ふの多少は其國開否文野の程度に比例すと、

以上の理由に因て佛教に所謂殺生戒は世界万物の秩序も人間の高尙なる權利も、萬物に長たる所以も知らざるより出でたといふことは明かである、斯の如き戒の世に行はるゝときは農、工、商の發達を碍げ、從て國家の勢力を減殺するものである、猶又此殺生戒の字義を一層汎く考れば凡そ生あるものは悉く

（十六）天主教の愛は禽獸にまで至らず

（十六）天主教の愛は禽獸にまで至らず

殺すことは出來ない譯である、科學を以て見れば草木も同じく生物である、動物と異なる所は感覺の有無だけである、而も何故草木を截ることを禁せぬか、問者或は曰はん、草木は感覺ない、然れども感覺あるものは苦痛わり故に之を殺すは情の忍びざる所であると、然り動物を憐むの情は誠に結構である、なれども然か感ずるのは大きなものに就てのみであらふ、昔は齊の宣王が牛に代へるに羊を以てせんとしたといふ話があるが、之と一般で目に見る所のみを感じたのである、動物を殺すに於て大小を以て憐みを異にするといふ所由は無い、若し動物を殺すを無慈悲とするならば蚤虱を捫るも無慈悲である、殺生が罪なれば植物の害虫やマラリヤ毒を移植す蚊、黑死病傳染の媒介なる鼠も殺してはならぬといふ道理である、換言は萬物の長たる人間が總ての生物の奴隸と成て甘じて彼等の害を受けねばならぬといふに同じである、これが眞の愛であらふか、若し日本に斯る博愛主義が盛に行はるゝならば多くの傳染病は忽ち蔓延で日ならず日本人は全滅するであらふ、毎度いふ

通り、天主教は造物主の立てた道だから決して道理にも、物の性質にも、學問にも合はないやふな規則は一もない、之に反して佛教の如く人の想像より出でた宗教は國の發達を碍げ、何萬の人間を無慘に殺すほど愚なる規則がある。

（七）或問、

非難の多い宗教は眞の宗教でない證である、今天主教を見るに之に向つて質疑難問のあること際限ないと思はれる、故に眞の宗教でない、

解答、

論難の主意を明にするは、其論難の誤謬の箇所半以上を指示に同じとは泰西の諺である、今此俚言の教に從て問者が非難の意を明にして見やふならば、眞の宗教は決して非難することは出來ないほど明確なものでなければならぬといふのである、シテ見ると世界には眞の宗教は無いと云はなければならぬ、何せなれば非難攻擊（誤謬の非難にもせよ）の無い宗教は一も無いからである、左樣な不道理な論はあるまい、此の解答を以て既に問者が論難の半は破壞されたものである、

（十七）天主教は非難多き宗教なり

（十七）天主教は非難多き宗教なり

凡そ天主教に對して爲す所の難問質疑は多く教義を故意に曲解るか或は附會るか、或は識らずして論ずるのである、假りに其非難が當然起るべき場合に於けるものと見るも、論難質疑のあるべきは素より其所である、試みに百科の學術を見よ、數學幾何學の如き定論公説の明かなるものを除くの外、何れの學問が質疑難問の無いものであるぞ、非難があるから虚僞だといふなら總ての學問も皆虚僞だと云はねばならぬ、世豈に此不法を稱るものあらふ、況や其非難の多くが附會、曲捩るに於ては猶さらである、吾人はいふ非難の無い宗政は僞教であると、如何となれば眞の宗教は無遍ある造物主の如き無形なる感的のことを研究する學問である、故に何うしても意味が深くて人智に及ばぬことが澤山ある、猶又一層深く考へて見るに天啓の道は餘り明細でなくして天主教の如くに啓示られたといふことは甚だ深い聖慮のあることである、毎常いふ如く現世は來世へ往く試驗場であるから、若し天啓の宗教が數學上の理論の如く、或は太陽の光が物を照すが如く明々白々一点の疑ひ

もないやふなものであるならば、恰も一と一とを加へて二となるといふことを疑はれないと同じく神の道を疑ふことが出來ぬから、人々は如何しても之を信じ守るやふになる、之は人の信仰の自由を縛るのだから試驗に成らない、換言ば吾人が若し現世に於て造物主の御德を肉眼で視る如く明かに識るあらば吾人の智も情も其善美なる御德に牽引れて信仰の自由を失つて仕舞、是れ造物主がわざ〳〵今世に隱れて在す所以である、委くいへば天主教は人々が何うでも信じなければならぬほどに明に天啓なされた道でなく、又信仰し兼るほど曖昧な道でもない、丁度其中庸を得た道である、故に心の公平な人であれば信仰することが出來る証據は總程もある、又心の不公平な人ならば種々の疑が起つて非難するやふな意味の深いこともある、聖書に善人は明を好み惡人は暗きを好むとあるが如く、人が善惡兩道の中央に立て善を好むものは信じ、惡を好むものは疑ふといふやふに宗教をば立てなされたのは神の難有聖旨であるといふことを感服せねばならぬ、舊約サビエンシア、十二章十

（十八）神無くんば却て幸福なり

八節に神は敬を以て人を攝理給ふといふことが書いてある、其意味は人間は自由權を具へた貴いものであるから、神は其自由權を碍げたり傷けたりせぬやふに主宰たまふといふのである、人間の信仰の自由を縛らないやふに天主敎をば立てなされたのは其爲である、即ち信ずるも信せぬも、從ふも背くも全く人間の智識の判斷に任せなさつた、それで天主敎の旨意を能く悟らない時は疑も起り易く、非難もし易いのである。

（六）或問、

神がなければ吾人は獨立で責任が無いから安心である、されば神が無いこそ吾人の爲に幸福と云はねばならぬ、

解答、

斯やふな難問は無上至尊神に對して罵詈いふと同じである、智識か無く毫も道理を知らないもの丶考である、斯くまでに神を侮ることは人性を辱しめるものである、吾人と同類ある、吾人と同胞なる人間の中に斯くまで神に對して不敬無禮ある惡口をいふものがあるかと思へば、吾人は實に恥か敢て冷汗が流れるほどである、

凡そ有形なる萬物は人間に至るまで皆有限物であるから終りあるものに相違ない、既に終りあるものなれば始め即本が無ければあらぬ、物に本末あく事に終始ないといふは眞理に合はない、今問者が神が無いのは幸福であるといふのは宛も吾は造られなかつたならば幸福であるといふに同である、例へば茲に親が無つたならば面倒も心配もなくて誠に幸福である、親があるから之に從ひ、之を養ひ、孝行をせねばならぬといふ責任が出て來のであるといふ子があるとしたら如何、是は親が吾を產まなかつたあらよかつたといふに同じだ、親に產まれ育てられた幾多の大恩を忘れて斯やふなことをいふやふな不孝の子は、これぞ眞の人面獸心、人にして人に非ざるものといふであらふ、苟も多少の智識を有つて居る人間が斯くまでに噛み斯くまでに捻れるとが何うして出來るかを吾人は疑ふのである、然しこれは度々いふ如く、情が腐つて善だの道德だのいふことを飽くまで嫌ふ爲である、傲慢にして己のみを負み、淫猥にして、不潔遊びを好み、貪婪にして金錢のみを貪ぼるから、

（十八）神無くんば却て幸福なり

（十九）神儒佛共に無上の神一あり

善惡に報ひ給ふ義なる神を太く恐れ嫌ふから斯の如きことをいふのである、さもなければ斯る耻ケ敗惡口をいふ理由が他に決して無いと思はれる。

（丸）或問、儒教では天といひ、佛教では彌陀といひ、神道では天御中主といひ、天主教では造物主といふて何の宗教にも無上神一つを信ずる、シテ見れば天主教のみ眞の神とはいへない道理ではないか、

解答、神、儒、佛ともに無上神を信ずるといふは眞である、が然し其無上神は如何樣のものであるといふことが此問題の主眼である、神の性質に就ては神、儒、佛ともに明かでない、儒教に所謂天とは何であるかといへば、活きるものか、活きないものかさへ分らぬ、只漫然天は理ありといふやうな答をする、是は實に曖昧なるものではないか、又佛教に所謂彌陀とは何であるかといへば、妄信の愚夫ならばいざ知らず、少しく學識ある僧侶ならば必ず即身即佛と答へるであらふ、即身即佛とは平易くいへば彌陀は即我である我は即彌陀であるといふのである、是れ佛教は万有神教の一種であるから、万有は神の

部分であると信ずるより起るのである、又神道に所謂天御中主は何であるかといへば八百萬の神々の主長であると答へる、之を以て見ると佛教神道に於ては待對と絶對の差別がない、無遍とは何か、有限とは何かといふことが解らない道である、此區別が判然しないからそれで人が死ねば神や佛に成るといふ愚説を信ずるのである、眞理哲學を以て見れば、眞の神は只無遍物のみである、即原因なくして永遠なる、自ら在らせられるものゝみである、故に何うしても一体でなければならぬ、又萬物と全く別あものでなければならぬ、而て天主教の神即造物主は、此哲學の定論なる無遍物、一体なるものと全く同じものであるから、是が眞の神で他教の神は道理に合はない、物の性質を知らない人間の想像から出た僞の神だといふことは明かである。

（二十）或問、天主教者は神を人間のやふに活きて居るものと信ずる、けれども是は大なる誤謬である、神は宇宙に充滿る一の大なる理体である、

解答、神の性質に就てはも曖昧な考をしたり、諸種の誤謬た考を起したものは無い、

（二十）神は理体なり

（二十）神は理体なり

神は活るものでなく只道理の總合だといふやうな考をする人は日本無宗教者の全部と佛教者の半數以上でおらふ、先づ理とは何であるか、眞と同じである、物の性質及之より出る結果、又其物と物との關係に就ての眞の規則である、古人も物あれば法ありといふた通り、物が無ければ決して理法規則は無いものである、例へば意識といふは智より出る能力だから意識は智の理法である、長、厚、高は物質の性質より出るのであるから長、厚、高は物質の理法である、此故に智を離れて意識といふ理法は無く、物質なくして長、厚、高といふ理法は決して無い、然して此理法とか規則とかいふもの其自身には何の力も働きも無い、是は只我々の智が抽象的に考へる思想である、之に依て神は理体であるといふのは、畢竟己れの思想のみを信ずると同じで神が無いといふのと異つたことはない、

神の活靈といふことは六ケ敷論せずとも明かに解る、先づ吾人は何う考へて世界万物に原因あるといふことは肯定せねばならぬ、而て其原因は活きるものであければあらぬ、何せなれば万物は智より出た結果と知るから、即工夫の蹟が歴然視へるからである、依て万物の原因は智にして、此智即神である、故に曰ふ神は活るものであると、

猶委しくいへば、或思想（勿論人間以上）の定めたる物の性質、働、或は他の物との關係、是れ即理法、規則である、而て思想は活きる智の他起すことが出來ない、例へば法律といふものは人と人、若くは政府と人民の間の關係を規定たものである、此關係を規定るものは思想で即活きる智より出たものである、又道德は善惡を比較て其關係を定めた規則である、故に善惡を悟つて之を比較る智がなければ道德法は有る筈が無いといふことは明かである、されば理法規則といふことには既に活る智があるといふことをも含むで居るのである、近く曰へば總ての思想理法あるは神の無遍ある智の中に含むであるので、神は其含むで居る思想理法あるの幾部分を形に顯したもの是即萬

（二十）神は理体なり

物である、故に世界萬物の理法規則は皆神の全智から出たので吾人は又其出たものゝ幾部分を悟るのである、之を以て一面からいへば神は活きる理体であると云へば云ふことも出來る、

此に於て結論す、眞の神は人の活るが如く活きる、人の考へるが如く考へる、人智の働く如く働くものである、又其生命は一時でなく永遠である、不完全でなく完全である、有限でなく無限である、結果でなく原因である、故に世界萬物と分れることも、離れることも、忘れることも、捨て置くこともあく、絶えず何時までも人間の思、言、行を監て死后其善惡に因て賞罰する、これを懼れるから人が多く神は理体であるといふやうな意味のない曖昧な想像説を稱へるのである。

（廿）或問、天主とは天の主と書く、天の主だけあれは萬物の主と稱されぬ、依て造物主とは別な神であらふ、

解答、天主といふ文字に就て非難あるは尤千萬である、本來天主といふ文字は造物主に最も不適當のものである、日本の公教者が造物主を指して天主と稱するのは孔子の書に天或は天帝などゝいふことが書いてあるから、之を其儘用ひて天主と稱したのである、然し天主といふても決して天のみを宰るといふ意味でない、天は萬物中一番廣大なる一番美はしいものであるから神の無遍を幾分か表はす、けれども不適當なることを免れない、故に天主といふ名は漢字を用ひる國のみに稱へられる名である、されば世人は天主の字義に拘泥して其意味を考へるがよい、實は神といふも無遍といふも造物主といふも皆不適當、不完全な稱呼である、眞の名は只一つの外ない、物の適當の名は其物の性質を完全に顯すものでなければならぬ、造物主といふは萬物を造つたものといふに過ぎない、無遍とは限りないといふに過ぎない、即何れも神の德の一部を云ひ現はす稱呼である、而して神の性質を全く表はす眞の名は只一つにして、神御自身がモイゼスに仰せられた、即在らせられるものといふのである、其意味は神が自然に在るものといふのである、眞にいへば神

（二十一）天主と造物主とは別物なり

(二十二) 造物主は何の要ありて存在するか

の性質は有である、總て始あり造られたものは其性質は無である。

(廿)或問、造物主は何の必要あつて世界に存在するか、

解答、是は又た奇なる問である、必要不必要といふことは其物を造つたとか、或は其物を用ひるとかいふものが他に存在する場合の他云はれあいことである、造物主は萬物の大原因である、造られたものでもなく、用ひられる者でもない、無遍にして無上至尊御者である、故に造物主の存在に對して必要不必要などいふのは頓だ間違で答へに及ばない、

然し今問者に數歩を假して敢て答へやふならば、造物主の存在せられることは其性質であるといふの外ない、何せなれば如何なるものでも其物と他の關係を除いて何の爲に存在するかといへば其物の性質で存在するといふの外ないと同じだからである、例へば活物は何せ活きるか、活きるといふ性質だから、火は何せ熱いか熱いといふ性質だからといふより答が出來ぬ、是と同じで造物主が何の爲に存在するかといへば造物主は存在する性質であるからと

いふより外はない、委しくいへば造物主は絶對にして飲點ないものである、

然るに存在せぬといふことは活きぬといふことで飲點の極度である、何せなれば存在せぬといふことは虚無と同じで絶對と正反對であるからである、故に絶對といへば存在するといふことを意味して居る、存在は絶對の性質である、依て造物主は何うしても活きて居る其生命は無限にして始もなく終もない、腹藏なくいへば造物主は何の必要があつて存在するといふ質問は意味のないことである。

(廿一)或問、天地万物を造つた造物主があるならば、又其造物主を造つた造物主がなければならぬといふ道理では無いか、

解答、此難問は前項のと同じく造物主の如何なるものかといふことを知らぬから起るのである、是も矢張前項の解答を熟讀ば自然疑は晴れる、造物主を造つたものがなければあらぬといふは意味のないことである、凡て物の大原因に原因がある筈が無い、原因のある原因は本原でない、例へば百といふ數は十

(廿三) 造物主が造りたる造物主あるべし

（廿四）宇宙も神の造りしものならば之を造る前神は何れに居りしか、

から來り十は一から來つたものであるが、一は數の本原であるから其本はあるべき理由がない、斯やふな問を爲るものは原因結果の眞の理を知らないからである。

（廿五）或問、無邊なる宇宙が神の造つたものならば、之を造る前神は何處に居つたらふか、

解答、先づ問者のいふ宇宙とはありとあらゆる日月星晨をいふのか、或は空間をいふのか明かでないが、然し日月星晨としても、又は空間としても無邊のものであい、成程天文學が開けて望遠鏡がます〳〵完全に造られるに從つて宇宙い益廣く成つて殆んど際限ないと思はれる、けれども宇宙は始めあるもので際限のあることは疑ひない、只其際限は何處なるか少しも分らないといふまでゝある、空間に際限があるといふたらチョット可笑と思ふたらふ、然し空間とは何であるか六ヶ敷云へば抽象的延長である、即有形物の占領場所、及物と物との距離のことである、依て有形物の無い前に空間の必要はない、

造物主は有形物を造ると同時に空間を造つたのである、又論者は宇宙を造る前に神は何處に居つたかといふが、是は有形物が空間或は場所を占領る如く神が空間又場所に居ると考へるから起る疑問である、無形物の存在の狀態は有形物の存在の狀態とは全然違ふ、此違つたものを同じに論ずるのは誤謬である、是は神と宇宙のみに限らぬ、無形なる靈魂が有形ある肉体と結合して居ることに就ても同じで、無形なる靈魂が如何樣にして有形なる肉体中に居るか其狀態は少しも考へられぬ、けれども居ることに疑ひない、神も同じく宇宙間何れの處にも居らせらることは疑ひ無い、けれども如何樣に居らせられるか決して解らない、無形物の存在は空間或は場所を要せぬといふことだけは明かである、斯く無邊ある神は有限なる宇宙に繼がれ縛られないものであるから宇宙の存在する前も後も神の性質、德、其存在の狀態などに些の異狀もない始終同じである、詰り宇宙は神の性質と何の關連もないのである。

（廿六）或問、造物主の全能は何を以て證するか、

（廿六）天主は全能なれば惡を爲すとも一と一を加へて三と爲すとも自由なるべし　五十八

解答、哲學上疑ひない定論は無遍、無差別のもので有限と共に在ることの出來ないものである、即或一點が無遍なれは全体も無遍でなければならぬ、或一點が有限あらば全体も有限でなければならぬ、同じ一の物が一点無遍にして一点有限あることは出來ぬ、即全く相反する性質を混有ことは決してないといふことである、所で世界万物は有限物なることはいふまでもない、有限物あらば時間に就ても有限であるから始が無ければならぬ、即本が無ければならぬ、斯く本から本へ尋究れば何うしても大原因即原因なき原因に達しなければならぬ、左もなければ末なる結果なる萬物の存在する理由が解らない、而て大原因であるから始があい、始がなければ時といふ一点に就て無遍である、ソコで前いふた定論に從つて全体も亦た無遍であること疑ひあい即智も力も善もあらゆる御德が皆悉く無遍である、是れ造物主の御力は無遍即全能であるといふ所以である。

（廿七）或問、天主は全能あらば惡を爲すことも一と一を加へて三と爲すことも出來ねばならぬ、若し出來ないならば全能とは云はれない、

解答、天主は全能であるから左樣なことは出來ないのである、全能とは不道理あこと愚なことをするといふ意味でない、總て道理あこと物の性質に合ふことならば能はざる所なしといふ意味である、天主は全能だから無遍である、故に其御德、御働、御行、は少しも間然がない誤謬が出來ぬ、所が惡を爲すとか、一と一を加へて三とするとかいふことは、大なる誤謬、大なる缺点である、完全なる御者に何うしてソンナ事が出來やふ、不完全なる人間にしても生得善人ならば何して人殺し盜などの惡事が出來やふ、況んや天主に於てれやである、若し問者のいふ如く、天主に惡を爲すことが出來るやふならば其善德は欠点なもの不完全あもので全善とは云れない、若し又一と一を加へて三とするやふな不道理なことをするならば全智どころか人間より愚なものである、何うして斯やふなものを神と敬はれやふか、元來天主のことを研究せんとならば、一の德のみを偏て考へてはならぬ、同時に他の御德をも考へぬ

（廿六）天主は全能なれば惡を爲すとも一と一を加へて三と爲すとも自由なるべし　五十九

（廿七）全能の神なりとも虚無より萬物を造出すこと能はざるべし

ばならぬ、例へば天主の全能に就て考へるならば同時に全智全善なることを忘れてはならぬ、天主の無遍ある憐を考へるときは、同じく無遍なる義をも合せて考へねばならぬ、一方のみに偏るから問者のやふな疑問が出るのである。

（芒）或問、天地萬物は無き所より造り出したといふ、如何に全能の神なればとて何も無き所より造り出すは不道理ではないか、

解答、天地萬物が虚無より造られたといふことを解明するのは人智に及ばぬ、如何様にして造られたか吾人は之は識ることは出來ない、故に天主教に於ては之を造化の玄義と名づけた、然し曉られないと道理に合はないとは全然違ふ、道理に合はないことは曉られないといはれる、けれども曉られないことは道理に合わぬといふことは出來ない、

天地萬物が虚無より造られたといふことは道理である、是非さうなければならないことである、天地萬物が無い所より造り出されたでないならば、即

何かの材料のやふなものがあつて之を以て造つたといふならば其材料は神と共に存在したもので始の無いものである、故に時に就て無遍である、然るに無遍は無差別にして一部が無遍なるものは全部無遍でなければならぬといふは前々からいふ通りである、故に有形物の如き其大きさ、其力が如何程廣大といふても限界あるものが時間といふことのみに就て無限といふことは有り得べからざることである、されば神が世界萬物を造つたのは虚無よりでなく、何か原料があつて之を用ひて造つたといふやふな考は無限物と有限物の性質を知らないから起るので、却て道理に合はない論である、

元來無神論者は物質不滅勢力恒存といふ説を唱へる、即世界万物は始も終も無く存在する、只其形狀が變化する斗りだといふ、雖然斯やふな考へをするものは如何に博識先生といふても哲學の端緒さへ解らない哀れ慕ない智識だといはなければならぬ、眞理に因て見れば天地萬物は有形だから有限である、故に何うしても始めあるもので虚無から出ねばならぬといふは瞭然ではない

（廿七）全能の神なりとも虚無より萬物を造出すと能はざるべし

か、然しながら如何樣にして出來たかは毫も解らない、只全能だから神の力に及ばぬことで無いといふことだけ解る、由來日本の人は道理を好む、何の論も道理々々といふ、これは誠に結構な習慣だ立派な人情だ、これが爲に驚くほど迅く開化に進むだのであらふ、然しながら如何なることでも道理が明かに解るといふことは出來ぬ、人智には定限があるといふことを承知せねばならない、例へば數學幾何學の如き確定した學問は其道理が全く解る、が然し哲學や道德の如き高尚な學問ならば普通の道理は解るが數學幾何學などに較べれば稱解り難い、有形物を研究する實驗學なども道理の能く解つたことが隨分あるといふても未だ人智に解らないことが如何程多くあるか知れぬ、物質の現象に就て是は道理である是は不道理であるといふことは多く出來ないことのみである、これは物質の力を悉く知らないからのことだ、今より凡四百年前天主教師が始めて日本へ渡來て西洋の發明物を見せたとき、日本人は道理に合はぬ不思議として魔術だと思ふた、それで天主教師を魔術師で

あると明治の僅か前までも信じて居つた、歐洲人でも三百年前に死んだものが若しも今日蘇生て來たならば、汽車の如く自ら動くもの、電氣燈の如く油も火も用ひずして光るもの、電話の如く何十里離れて居つて人と直接に談話するなどのことを見て、何と思ふであらふ、道理だと思ふだらふか、決して道理と思はぬ不思議とするに相違ない、尚又明治の初年頃に於て今より三十年後にレキゲン氏のX光線と名けらるゝものを發見して僅中にある物品を開けずして見ることが出來る、体中の骨格が肉を透して見えるなどゝいふ人があつたならば如何、西洋の大學者までも架空の話だ、一場の諧謔談だとして齒牙に懸けないくらいであらふ、之を以て見ると今より百年后には世の有樣は何んなであらふか、吾人の子孫の如何なる珍い發明、未だ知らない力を發見して之を使用であらふか、吾人が豫め之を知つたならば今道理に合はないやふに考へることが的解つて驚くであらふ、シヲ見ると數學幾何學哲學道德などに就ては道理を以て論ずるといふは勿論然るべきことであるが、

（廿八）天主が虚無より萬物を造りしは無を有にしたるに同じ無法と云はざるを得ず

實驗學に關すること、總て物質上の論議ならば道理を以て論ずる前に先づ〳〵深く考へねばならい、故に天主が無き所より萬物を造つたといふ神の性質、物質の性質に關係する論の如きは、其深い意味を研究せずして道理に合はないといふは考の足らない人だ、研究もせずして斷定るのは幼稚の考へである。

（廿九）或問、天主が何も無い所から万物を作つたといふは、無を有にしたと同じである、是は二と二を加へて五とすると差つたことない、なんと無法の神もわればあるものである、

解答、これは甘く拵らへた理窟である、此の難問は無を有にするといふ言語が議論の基礎に成つて居るのだ、それで道理らしく聽へる、成程無を有にするといふは二と二を加へて五にすると同一である、が然し天主は無を有にしたのではない、無より有を出したのである、即無を其儘有にするとか三角を其儘四角にするといふやふなことは素より天主と雖も出來ない、無より萬物なる有を出したのは全然別な意味である、故に右の難問は只よりといふ語をといふ語に代へて出來た理窟である、通例無い所より萬物を造つたといふて居るが、これは不完全の語である、何も無いといふ語と所といふ語は合せて使はれぬ語である、所といへば物を意味する、物を離れて所は決してない、開闢の已前は無遍なる造物主の外一物もないから所はある筈が無い、それで萬物を造つたといふは無き萬物を有らせたのである、嚴密いへば無より萬物を造つたといふは比喩のやふな語である、實は存在せざる萬物を存在させたといふべきである、之は明にして曖昧の意味でなく決して理窟の種にはならない。

（卅）或問、吾人のやふな、小さな人間の爲に斯く廣大なる宇宙を造つたといふは、子子の爲に大海を造つたと同じである、造物主は物の釣合さへ知らぬと見へる、

解答、宇宙は人間の爲のみに造られたといはれやふか、火星や木星のやふな遊星中に人間に類たる生物が棲で居らぬと斷言やふか、猶も天文學を以て見れば、

（卅九）微小なる人間の爲に廣大なる宇宙を造られたるは權衡を知らざる神なり

（廿九）微小なる人間の爲に廣大なる宇宙を造られたるは權衡を知らざる神なり　六十六

太陽界の如きも極めて小さな世界で、其他まだ大きな世界が何百億ある、此大きな澤山の世界中に智識を具へたものが有か無かさつぱり解らぬ、是れが解らなければ人間の爲のみに宇宙を造つたとは斷定られぬ、知らないことを以て論ずることは決して出來ないとは吾人の毎度いふ所である、此故に天主教に於ては人間の爲のみに宇宙を造つたなどいふことは假りにも教へない、さやふな考をするのは智識の開けぬ人が人間を以て萬物の中心とする腐臭い考へである、極めて廣い意味から考へれば造物主が斯く廣大なる宇宙を造つたのは人間の爲でなく御自分の爲である、御自分の德力榮を顯はしなされたのであるといふことは明かだ、人間といふものは解らない氣儘勝手なもので、何に付けても決して滿足に思はない、全能全智に在す神が如何ほど善盡し美盡した世界を造つてもまだ何か不足をいふ、宇宙が人間の爲に餘りに過大と思ひ不釣合だと考へるものは、人間に權衡た小さな宇宙を造つたならば猶更不足をいふ、神の力は薄弱目的が淺薄、規模が餘りに小さいなどゝ

（三十）或問、造物主は全智なれば不必要のものを造る筈がない、然るに畑に生へる雜草などは害あつて益のないものだ不必要に相違ない、人間は實に惡い癖を一つもつて居るものだ、人間の正直な堅固な性のものには少も疑はず安心して萬事を信任るといふ風だが、全智全善なる造物主のことなれば何でも疑ひ何でも不審に思ふ、而て若しも解らぬならば直に其疑に牽引れて造物主を捨て、或は造物主に對して輕蔑するやふな口調で難問するといふ捻れた根情がある、

成程彼の雜草の如きものは農夫の爲には害あつて益が無いかのやふに見える、雖然これは比較から出るので眞實に益がないのでは無い、即作物に對し

出放題な小言を列べるだらふ、成程問者のいふ通り宇宙は人間の肉体に比べては廣大に過ぎる、雖然智識の爲には如何、無遍なる思想を起すべき人智の爲に無遍とも思はれるほどな廣大なる宇宙は實は適當の御作ではあるまいか。

解答、造物主は全智なれば不必要のものを造る筈がない、然るに畑に生へる雜草などは害あつて益のないものだ不必要に相違ない、人間は實に惡い癖を一つもつて居るものだ、人間の正直な堅固な性のものには少も疑はず安心して萬事を信任るといふ風だが、全智全善なる造物主のことなれば何でも疑ひ何でも不審に思ふ、而て若しも解らぬならば直に其疑に牽引れて造物主を捨て、或は造物主に對して輕蔑するやふな口調で難問するといふ捻れた根情がある、

成程彼の雜草の如きものは農夫の爲には害あつて益が無いかのやふに見える、雖然これは比較から出るので眞實に益がないのでは無い、即作物に對し

（三十）全智なる造物主が何故有害無益の物を造りしや

（三十）全智なる造物主が何故有害無益の物を造りしや

て、雑草は害であるが、秣堆肥料としては益があるだらふ、又世間で多く不必要だの害だのといふのは未だ其物の必要有益なことを發見ないからである、今より十數年前までは蚯蚓が耕作物の爲に害あつて益ないものと思ふて居た、然るに近頃に至つて蚯蚓は土壌を肥すものだ、即ちフームスといふ土壌は蚯蚓の在る所に多いといふことが實驗に因て漸く分つた、又細菌學に於て種々の微菌は傳染病の原因で人間を殺すほど大害のみあるものだと思ふて居たが、十年前から是等の微菌中には人間の生命を直接に保護ものも亦た多くあるといふことが分つて來た、昨年佛國に於て如何なる微菌も總て入らないやふに工夫して其處に兎を飼つて驗した所が間もなく死んだ、之に依て活物が其生命を保つ爲に是非とも必要な微菌もあるといふことが知られた、されば今日益が無いと思ふても明日益があることを知るか斗られぬ、無益のやふに思はれるものは現に今澤山ある、蚤、虱、蚊、蜉蝣の如きものは如何なる益があるか分らぬ、然し分らぬから無益といふのは思慮の足らぬ、何の證據もなくて事を判斷する粗忽者である、眞正の學者は決して左樣な輕忽のことはいはぬ、物の益を知らあければ知るやうに屈せず撓まず研究する、これが學者の本分である、何せなれば世界萬物皆偶然に發生たものは一もないからである、偶然とは原因も理由もないといふ意味だから、學者の用ひべき言語でない、偶然に發生たものでないならば如何なる草でも如何なる虫でも何か益、理由、規則、などがあければならぬ、之を研究して益發見すのが學問の目的である、學問がないほど物を疑ひ、物に驚く、學問に達するほど輙く驚きも疑ひもせぬ、依て右のやうな疑問は決して學者の智識から出たものでなく、無學な人の頭から湧き出した愚な疑問である、斯やふな疑を晴すのは少しく學問して智識を開くといふが一番捷徑である。

（卅一）或問、生來不具の人間がある、神が斯く不幸なものを造るのは不道理で憐の心が無いといはねばならぬ、

解答、難問の趣意を一層擴めれば、神が現世の如く病難苦死のある世界を造つた

（冊一）天主が不具者を造るは憐に於て缺くる所なきや

のは不道理で憐が無いといふに同じだ、往古から人々が世界の有様を見て皆斯く疑ふ所で、造物主の無遍ある性質を能く知らなければ此の疑の爲に或は無神論に成り、或はマニシエルといふ異教の如く善惡二の神があるあどいふ誤謬た考をする、是は實に大切な問題だから論理に依て深く講究ねばならぬ、

造者ある神が全智全善であるといふことゝ、彼造物なる世界に惡や難儀のあるといふことゝは不權衡な話である、全智なる造物主があるなれば現世の如き不秩序の世界がある筈なく、全善なる造物主があるならば病難苦死のある世界が存すべき道理はないと疑ふのは尤も千万である、此深い論を明かにしたいならば豫め承知して置かねばならぬ原則が一つあるそれは、即總て明に解た定論は譬ひ之に對して如何なる疑ひがあらふとも、解らない理由があらふとも決して之を誤謬としてはならぬといふことである、此原則は獨り宗教哲學のみならず實驗學にも應用しなければならない、例へばX光線の如

き實驗に因て明に認た現象は、假し其理由、其力、其働などが毫も解らぬといふても、其現象を疑ひ若くは認めぬことは出來ないといふが如きである、ソコで眞理から見るも哲學から考へるも他の學問に依るも多くの明確な證據があることは二つで、一は万物の本原なる造物主のあるといふこと、二は其造物主は原因なき原因であるから絶對即無遍である、故に全智全善にして微少も不義不道理も憐の缺けることも決してないといふことである、此定論は明にして疑ひない、依て前の原則に從つて世界に如何程缺点あり難儀不秩序があるとても之を以て造物主の有ること及其全智全善なることを疑つてはならぬ、これは論理に違背ことである、

造物主の存在と、全善全智あるものには決して不道理、不秩序、不道德なことは決して出來ないといふことは疑ひないおらば世界に不道德、不秩序、不道理あことの在るは造物主よりでなく他の原因から來たと結論あければおらぬは論理である、然らば其他の原因とは何であるか、何うでも造物主の立て

（冊一）天主が不具者を造るは憐に於て缺くる所なきや

（卅一）天主が不具者を造るは憐に於て飲くる所なきや

られた秩序に依て万物の長たるほど大なる權利を具へたるものでなければならぬ、即自ら己の生命を奪ふほど世界を擾するもの、造物主に背き之に敵對するほど大なる自由權を與へられた人間でなければならぬ、斯く道理に因て得たる結論は舊約聖書の初に記されたる所と全く符合する、舊約聖書にある所を見れば開闢の時に世界万物は其力、働、現象あぜは人間に害なきのみならず人間を益し人間を保つやふにのみ造られた、又人間は其肉体に苦痛も病氣も死もなく、靈魂には智が明かで情は正しく能く造物主に遵ふやふに造られた、約めていへば總ての有形物は萬物の長たる人間に遵ひ、人間は造物主に遵ふといふが開闢の時に造物主がお定めなされた秩序であつた、然るに大たる自由權を與へられた人間は造物主に從ふも背くも秩序を保つも壞るも自由であつたから、人間の元祖は不幸にも造物主に遵ふべき秩序を壞り大罪を犯した、其結果として同時に世界萬物の秩序が紊れたのである、換言ば造物主に從ふべき人間が造物主に背いたから其報ひとして人間を保つべき萬物

が人間を害するやふになつたのである、人間も萬物も神の詛を受けて授れて仕舞たのである、これが此世に病難苦死の生じた眞の原由である、此道理なる論を除くの外現世の不秩序ある理由を解明す道がない、昔から哲學者や諸宗の開祖等が之に就て種々解釋たが此眞の原由を知らないから、或ものは神は無いといひ、或ものは善惡二の神ありといひ、或ものは世界が偶然の發現だといひ、又或は釋迦の如く前世の因果といひ煩惱の苦縛といひ、王陽明、ルーソーの如く本來善惡無しといひ、スペンセル、ショッペンホーエルの如く不可知、不可思議などゝいふたのである、眞の原由を置いては何と解釋ても畢竟愚説たるを免れない、眞の宗教に依らずとも大哲學者あれば己の智識のみで眞の原由を曉ることが出來る、希臘の哲學者ソクラテスなぜは其一人である、彼は曰く全善なる造物主の造つた世界に難儀苦痛のある筈は無い、これは疑ひなく人間の先祖に神に背いたものがあつて今の如き世界に成つたのであらふと此道理なる論に服せぬやふな人は迚も基督の深い恩惠に與る

（卅一）天主が不具者を造るは憐に於て飲くる所なきや、

（卅二）天主が萬物を造りたる目的は之を解するに苦む、

ことは出來ぬ、

猶終りに當て不具者の生れるは造物主の誤りでなく人間の誤りであるといふことに就て一言しやふ、醫學に依て見ると不具者或は虚弱者の生れるのは多く最近い血族の婚姻、或は年少者婚姻、又は其親の不身持、不養生、不品行、若くは酒飲に耽るなどに原因するといふは明かである、されば問者の如きことをいふは、人間の野卑、不潔、癖や愚なる過失を全智全善なる造物主に歸すると同じで無上至尊造物主に對して如何程不敬不忠不孝であるか量られないものである。

（卅三）或問、細工人が一の器械を造るにも必ず目的が無くて叶はぬ、然るに造物主が天地萬物人間を造つたといふても其目的は少しも分らるぬ、

解答、造物主が無遍にして全智に在すから猶更目的が無くて物を造る筈がない、ソコで目的といふものは總て之を立てるもの、性質に全く適當せねばならぬ、例へば人間あらば立てる目的が己の性質に釣衡て有限的である、といふやふ

でなければならぬ、シテ見ると造物主は無遍であるから決して御身分に不釣衡な有限的の目的は立てられない、矢張其性質の如く無限的でなければならぬ、換言ば造物主が何かをお造りなさるには、分うしても御自分の他無遍なるものが無いから御自分の爲でなければならぬといふは明な論理である、之に依て造物主が世界萬物を造つたのは御自分の榮の爲だといふことも疑ひない、然るに被造物なる萬物は皆悉く物質のみである、其中に曉る力のある智と愛する働きのある情を具へたものが無いならば神の榮の爲に何にも成らぬ、神の榮の爲には智があつて其御力、其廣大無遍なる、其美なることなどを曉り、又情があつて之に感じ、己の造られた恩受けた惠を考へ、之を愛し之に恩謝するものが無ければならぬ、それで智と情を具へた人間を造られたのである、されば聖書に記された通り、吾人々間は智も情も無い物質界の首長と成り、其代理者と成つて造物主を曉り、感じ、愛し、禮拜し、恩謝するのが其義務であるのだ、人間は此義務を盡す爲に造られたのである、これが

（卅一）天主が萬物を造りたる目的は之を解するに苦む、

(卅三) 天主は善人を造りて天國の賞を與ふる目的ならずや、然るに其目的に反して惡を爲し地獄に墮るもの多きは何故ぞや

世界萬物を造つた造物主の眞正の目的である、其他又造物主は無遍にして全智全能全善だから、其愛も憐も矢張無遍である、であるから人間を造るに親が子を愛するが如く幸福、快樂を得させたいといふ目的も無論含で居る、雖然他のものを助けたり悅ばせたり幸福を與へたりするのは矢張造物主の榮譽で他のものを難儀させ苦ませなどするは恥辱である、之に依て見ると人間が造られたのは造物主の爲であるけれども亦た人間に幸福快樂を得させる爲でもあるのだ。

(卅四) 或問、立てた目的が外れるやふでは神とは云はれぬ、神が人間を造つた目的は惡を犯させたり地獄へ墮したりする爲であいとは前項の解答に依て明かである、然るに其目的は外れて人間は惡を犯して地獄へ墮るものが多いやふだ、シテ見ると神は無いか、若し有るとすれば全善でなくて却て惡を好むか、全智全能でないから目的が外れるやふな過失を出したのであらふ、

解答、天主教に對する難問の多くは言語の意味が曖昧であるから起るのである、今

問者のいふ目的といふことには二種の意味があるといふことを明にせねばならぬ、其二種とは一を確定的目的といひ二を假定的目的といふ、この二を混同したならば難問は如何にも尤らしく聽ゑるが多少論理を辨へたものは左樣な淺薄な工夫には決して釣込れない、先づ確定的目的とは確然決定た目的であつて、例へば價値の高下に係らず或書冊を必ず買はうと決定る類で、これは己の力のみに由て立てた目的である、斯の如く確定した目的が外れるといふとは神の働作でない、若し外れたならば力の足らぬ限あるものといふ證である、造物主が確焉と極めた目的ならば必ず達せられて居る外れた目的は一もない、然し假定的目的はこれと違つて確固極まつたのでない、これは他の者の働に依て達すると達せぬのが極まるのである、例へば價値が廉ければ或書冊を買はうと極めるの類で、果して買ふか買はぬかは價値の高下に由るのである、それで之は假りに定めた目的である、斯やふな目的ならば買はなくとも外れたのではない、何せなれば價値が廉ければ買ふといふことは換

(卅三) 天主は善人を造りて天國の賞を與ふる目的ならずや、然るに其目的に反して惡を爲し地獄に墮るもの多きは何故ぞや

（卅三）天主は善人を造りて天國の賞を與ふる目的ならずや、然るに其目的に反して惡を爲し地獄に墮るもの多きは何故ぞや

言ば價値が高ければ買はないといふことである、故に買はなくとも矢張初の目的を達して居るのだからである、造物主は無遍であるから其目的を假定的に立てるも確定的に立てるも自由である、而て造物主は全善であるから人間に幸福を與へるといふ目的であることはいふまでも無いが、然し其目的は假定的でなければならぬ、其理由は二つある、

第一、造物主は全智にして無遍なる義を具へ給ふ故に何の功も無いものに幸福を與へるやふな義に歆けることは決して出來ない、

第二、造物主は全智全善であるから惡を割せぬといふやふなことは決して出來ない況んや惡を爲すものを賞するやふなことは猶更出來ないといふこと、

この二つの理由があるから造物主が人間を造る目的は終りなき幸福を與へるといふのであつても其目的を假定にしなければならないのである、即人間が善行をするならば幸福を與へるといふ目的でなければならぬ、これは恰も價値が廉ければ買ふといふに同じで、人が善を行はなければ幸福を與へないといふことを含むで居るのである、故に造物主の目的は直接か間接か必ず達せられて居る、之に依て神の立てたる目的の外れるといふは假定的のものだからであれば神が無いとは云れない、又人が地獄に墮るのは神が全善で惡を嫌ひ給ふからである。

（卅四）或問、或働きを止める力を持ちながら止めないならば暗に其働きを贊成すると同じだ、造物主は全能にして人間の事を止めるのは最と容易い、然るに之を爲すが儘に放任てゐいて止めないのは暗に其惡を同意するので全善とは云はれない、

解答、總て停められる働きを止めないのはそれに同意するのだとは云はれぬ、果して其事に同意するかせぬかといふことは意志に因て違ふ、例へば親が子に金錢を與へて之を有益の事に仕ふか無益の業に費すかを試みた、然るに其子は放蕩に浪費た、此場合に親が放蕩に同意した贊成したのだといはれやふか、親が金錢を與へおければ勿論浪費ことは出來ない、けれども同意したのでは放任するは暗に惡事を發助するに異ならず、

（四）天主は人の惡事を抑止すること容易なり然るに其の爲す儘に放任するは暗に惡事を贊助するに異ならず、

ない、若し停めないから贊成するのだといへば試みは出來あいことになる、忌な例へだがモ一つ擧げれば今日本に娼妓といふものが公許されて居る、然し公許したから政府が此不潔な營業を贊成するとはいはれない、素より之を禁じることは容易い、けれども禁じればこれより生ずる弊害は娼妓を公許してあるよりも大きい、何處の國も獸欲的人間があるから公娼を禁じれば內々の淫賣が行はれる、從て風俗を紊し黴毒が流行するといふやふな害が續々と起る、それで止むなく公許してあるのだ、約めて云へば利害得失の差引からすることで道理である、シテ見ると惡事に贊成せずとも禁じない止めないことのあるも一概に不道理とはいはれない、

造物主が全能を以て人間を宰るに其惡を停めるのは最と易いことだ、けれども總て惡事を停めて爲せないやふにするのは自由を縛るのである、善のみ行て惡は何うしても犯せぬやふな人間ならば自由權の無いもので其働きは器械的である、依て人間ではない、人間たる以上は是非とも自由を與へなければな

らぬ、既に自由があれば善を行ふものも惡を犯すものもあるべき筈である、然らば惡をさせぬやふ要そ人間を造らぬ方が良いか、我は惡を爲るものがあつても人間を造る方が良からふか、若し人間を造らなければ惡人はないが然し善人もない、罰されるものはないが賞されるものも無い、何百万の人が地獄に墮ちて終りなき苦痛を受けるのは慾然の至りだ、然し何百万の人が天國に往つて終りなく幸福を取けることが出來ないのは可哀想で無からふか、造物主に對してわざ〳〵不忠不孝なる人間を助ける爲に造物主の爲に一生涯を献げて迫害られ、苦められ、善を行ひ功を立てた善人を捨てるが良からふか、斯く論じて見れば茲に明かな結論が得られる、即總ての神學者が云ふ如く全善なる造物主の眼から視れば一人の大熱信者は何百人の無信者よりも大切である、地獄に墮ちる惡人より天國に往く聖人が如何程大切か比べること出來ないことは宛も親が五人の不孝な子よりも一人の孝行な子を深く愛すると同じであると。

（卅四）天主は人の惡事を抑止ること容易なり然るに其の爲す儘に放任するは暗に惡事を贊助するに異ならず、

（卅五）天主が己れの意に適はざる地獄に墮るが如き人間を造りしは未來を知るの明なきものならずや

（卅六）或問、造物主は人間を造らない前から人間の行末を知つて居る、然るに其聖意に適はざる地獄に墮るやふな人間を何故造り出されたか、

解答、これは前項の難問といひ方が差ふだけで意味は同じだから解答も矢張同じである、

造物主は全智に在して未來を知り給ふから人間を造らぬ前から彼は天國に往きも是は地獄に墮ると明に知り給ふことは疑ひない、又全善に在すから一人たりとも地獄に墮す爲に造つたではないといふことも明である、然らば何故地獄へ墮るものがあるか、前項の解答にいふ通り地獄に墮ちない人間のみを造るは自由の權利を有たぬ人間を造るの外道がない、自由の無いものは人間でないから畢竟人間を造らぬといふの他ないといふことは解つて居る、地獄に墮るやふな人間を造らない方が良いと思ふならば、矢張天國に往く人間も造らない方が良いと思ふか、之を良いと思はないならば問者の考は撞着して居る、天國に往く人間を造るのは良いとするならば是非とも地獄に墮る

人間を造るのも止むを得ないとせねばならぬ、何故なれば善惡を撰む自由を與へなければならぬからである、譬身の爲に持つ刀ならば正宗の如き鋭刀でなければ益がない、然し誤れば人を殺す、病氣を癒すに効あるものは劇藥である、然し誤つて服用ば体を害す、斯く害あるのは刀や劇藥の惡いでなく使用方の惡いのである、人間が地獄に墮るのは自由といふ貴い利器を誤つて用ひ、わざ〳〵被つた罰であるから畢竟自業自得である、地獄の酷罰も僅の心配で免れることが出來る、然るに其僅の心配さへせぬやふな愚者の爲に人間を造らぬといふは不道理至極といはねばならぬ、或人が己れに生れべき子の五人の中四人は健全で一人は不具であるといふことを豫め知つたと假定よ、此人が一人の不具を産まぬ爲に寧そ婚姻せぬが良いと思ふだらふか、一人の不幸者を憐む爲に四人の幸福者を捨てるは道理だらふか、斯くいはゞ、問者は又いふであらふ、造物主は全能だから善人のみ生れるやふに仕たならよからふと、然し左やふな考は幼稚のすることだ、生れぬ前から其行が

（卅五）天主が己の意に適はざる地獄に墮るが如き人間を造りしは未來を知るの明なきものならずや

（卅六）人の行爲は神の聖旨に依るといふ、然るに何故或ものは天國に往き或るものは地獄に墮るが如き不公平あるや

確固と定まつて居るならば完然人形に演劇させると同じである、造物主が人間を造つて五六十年間此世に置くは何の爲であらふか、唯人間が善を行ふか惡を行ふか、神に事へるか事へないかといふことを驗す爲である、簡短に云へば現世は未來の試驗場だから、人々は各自の自由權に由て勝手に働けるやふせねばならぬ、强て善を行はせることもなく、惡を犯さぬやふ束縛もせぬ、全く善惡兩道の眞中に立せて、何方に傾むくかは各自の自由であるといふやふにせねばならない、左もなければ芝居をする俳優と同じで賞めることも何もない、故に問者のやふな疑問を起すのは絶對無遍なる造物主の性質を知らずして、造物主を人間の如く見做すからのことである。

（卅六）或問、人間の行は總て神の聖旨に出る、然るに或ものは天國に往き或ものは地獄に墮るは不公平と思ふ、

解答

此難問を云ひ換れば人間には自由の權がなく其行ひは全く時計の螺線鋼を卷き滊罐車の栓の開閉に因て運轉する如く器械的である、故に天國の賞を與へ

地獄の罰を與へるのは偏頗であるといふのだ、これは前々からの解答で最早充分盡してある、人間は自由權を具へて居るから、其行は決して神の聖旨でない、獨立して居るから其行は自動的であつて他動的でない、器械の運轉とは全然違ふ自由權は無遍ある神に敵ひ神に背くことを得られるほど深い權利である、神を愛するも嫌ふも吾人の自由である、神を敬ふも侮るも吾人の勝手に出來る、此自由があるから人間は高尚であるのだ、此貴い自由を具へる代りには其行の責任は各自が負はねばならぬ、故に若此自由が無いならば其行に責任がないから動物と同じく珍い器械たるに過ぎない、シテ見れば吾人が死後幸福を受けるも禍難を被むるも神の偏頗心に因るでなく、神の無遍なる義に因り吾人の行を審判して罰賞を定め給ふであるといふは明かだ、此故に問者のいふ所が眞なれば神もなければ人間もないと云はねばならぬ、何せなれば不公平なものは神でなく、自由のないものは人間であいからである、なんと奇な疑問ではないか。

（卅六）人の行爲は神の聖旨に依るといふ、然るに何故或ものは天國に往き或るものは地獄に墮るが如き不公平あるや

（冊六）人の行爲は神の聖旨に依るといふ、然るに何故或ものは天國に往き或るものは地獄に墮るが如き不公平あるや

解疑第一篇 終

解疑第一篇正誤

頁	行	誤	正
目次第二頁、	一行	全ふすには	全ふするには
第四頁、	見出し	人生の	人間のまことの
仝 頁、	一行	眞の	眞の
第十四頁、	十行	界は狀勢	界の狀勢
第十七頁、	十一行	何教に	何故に
第十八頁、	九行	の所有で	の所爲で
仝 頁、	十行	主の手爲なる	主の所爲なる
第十九頁、	三行	非なるのしさを	非なるものさを
第二十一頁、	九行	規則き依て	規則に依て
第二十七頁、	二行	ないかでらある	ないからである
仝 頁、	四行	啞番に	啞者に
第二十八頁、	十二行	論じた後	論じて後
第三十頁、	十行	天主義で	天主教で
第四十四頁、	一行	解るか或は	解るは或は
第六十七頁、	七行	性のもには	性のものには
第八十頁、	見出し	（四）	（冊四）
第八十一頁、	見出し一行	然するに	然るに

明治三十四年十一月廿五日印刷
明治三十四年十二月壱日發行

著者　佛國　ドルワルド、レゼー
發行人　甲府市太田町第百九十五番戸　林壽太郎
印刷人　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉
印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社
發行所　東京市神田區錦町一丁目十番地　三才社

318
22

318
22

013551−001−4

318−22

解疑

ドルワール・ド・レゼー／述

林 寿太郎／記

1冊（86p）

M34，35

ABA−0012